
黄巾の旗は二度翻る

砕け散る檸檬果汁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黄巾の旗は二度翻る

【Nコード】

N7245X

【作者名】

砕け散る檸檬果汁

【あらすじ】

後漢末期。黄巾党による反乱は後の世に名を連ねる英雄たちの手によって失敗に終わった。男は現実から目を反らすため再び立ち上がる。その果てにあるのは復讐か破滅なのか、それとも平穏なのか……

プロローグ ある男の末路

辺りは血の臭いで充満しており、口の中では砂と血の味が混ざり合い、土と鉄の味がする。

辛うじて映る視界には永遠に続くかと思われるような死体の草原が広がっており、所々では火の手も上がり、たとえ誰かがこの場所を地獄と言ったとしても誰も疑わないだろう。

このような場所で地面に伏しながらも辛うじて意識を保っていた、この男は不幸なのかもしれない。

ほんの数刻前まで黄色に染まっていた大地は今や変わり果て、赤一色となっていた。

男の倒れている地面も例外なく赤く染まっており、その色の持ち主が男のモノなのかは本人にすら分からない。

ただひとつ分かることは、程なくしてこの男も周りに転がる肉塊と変わらなくなるだろうということぐらいだった。

それでも男は死を嘆くわけでもなく、ましてや悲しむわけでもなかった。

ただただ憤懣で溢れていた。

なぜ自分は死んでしまうのか、誰のせいで死んでしまうのか。

原因を作った者を恨み、仕向けた者に怒り、殺した奴らを憎む。

そして……このような一片の救いすら無い最後を迎える自分に絶望した。

その時、視界の隅で何かが動いていた。

陽の光が作り出した二本の長い影が男の顔に被さる。

二人の人物はどうやら話しているらしく声らしきものは聞こえるのだが内容までは分からないが、声からして男であることは予測でき

た。

辛うじて見える限りの状況から推測して二人は地面に転がっている死体を一つずつ何やら確かめているらしい。

どうせ、せこい盗賊が死体の身ぐるみでも剥ぎにきたのだろうかと思っっていると、どうやら男の番がきたらしく声の主と思わしき人物達が男の傍らに佇んでいた。

そのうち片方は年端も行かない少年の姿をしており、もう一人の男は線の細い体をしており神経質そうな目つきをした眼鏡をかけた男だった。

傍らに佇む二人はなんとも奇抜な格好をしており、そのあたりの盗賊とは思えなかった。

「しかし死体を弄繰り回すとは相変わらず悪趣味なやつだな」

「そのように嫌そうな顔をするのならば別について来なくても良いのですよ?」

「お前を放っておくと何を為出かすか分からないからな」

「左慈さんには言われたくないですが……でも残念ながら今回は死体を弄らなくてもよさそうですよ」

眼鏡の男は口角をニツと上げると地面に倒れ伏している男を見た。

「今日この日に私たちが生きて出会えたことは、なんと幸運なことなのでしょうね」

眼鏡の男は芝居がかった大仰な言葉を吐くと男に手を差し出す。

「このような地獄を作った者達に復讐をしましょう。奴らに同じ地

獄を味合わせてあげましょう。そのための手助けを私が致しまし
う」

眼鏡の男は慈悲深い笑みを浮かべながら地面に倒れ伏す男を物の値
踏みをするような目で見つめる。

その姿はか弱い子供を攫おうと手を伸ばす鬼のように男の目には映
った。

だが、男は一瞬の躊躇すらなく眼鏡の男の手を掴んだ。

ただ一時でもこの地獄から目を反らすことができるのであればと願
いながら。

「ふふ、私を楽しませてくださいよ」

楽しそうに笑う眼鏡の男とは対照的に左慈と呼ばれた少年は、いか
にも面倒臭そうな顔をしている。

だが、そんな様子など気にもしないのか眼鏡の男は一頻り笑うと男
を軽々と担ぐと、地獄に一陣の風が吹いた。

砂埃を空に巻き上げながら突風は血の匂いと生者をどこかへと連れ
ていった。

突風が止んだとき地獄からは一人残さず生者は消え去った。

プロローグ ある男の末路（後書き）

初めての小説ということまで至らない部分も多くありますが、どうかよろしくお願いします。

基本は2週間に1話ぐらいのペースでかけたらいいなと思っていきます。

誤字脱字などを発見して下さいましたら報告などをしていただけると嬉しいです。

第1話 張角再誕

男は重いまぶたを擦りながら目を覚ました。

僅かな視界に入るのはお世辞にもキレイとは言えないくすんだ白色の天井だった。

寢床から起き上がり部屋の中を見渡すが、ここがどこなのかは男にはさっぱり分からないが、幸い部屋にも窓があったので外を見てみると建物が通りに面しており、道の端では頭に鉢巻を巻いた商売人らしき男が声を張り上げて通行人に商品を薦めていた。

眼下に広がる平和な街の様子は目を閉じれば鮮明に蘇る先ほどまでの地獄を男に夢ではないのかと惑わすには十分であった。

男は確かに瀕死の重傷を負っていたはずだった。それが目を覚ましてみれば知らない街の宿におり、体には傷の跡すら見つからないのだ。

だから、あれは悪い夢に違いないのだと男は重たかったのだが、その時不意に開いた部屋の扉から入ってくる人物を見た時、あれは夢ではないのだと確信してしまった。

「おや、ようやく目を覚ましましたか」

「……………」

「体はどこか痛みますか？」

「……………」

眼鏡の男は何一つ反応を返さない男に優しく問いかける。
喉は渴いてないかと、お腹は空いてないかと。

男は喉も渴いているし、腹も減っている。

だが、そのようなことよりも別の思考が頭の中を埋め尽くしていた。目の前のこいつは誰なのだと、なぜ自分を助けたのだと。

聞けば目の前の眼鏡の男は質問に丁寧に答えてくれることだろう。だが、頭のどこかで何も聞くな、無視をしろとけと警鐘を鳴らしていた。

目の前の男と言葉を交わした瞬間に、この先に人生のすべてが男のモノになってしまふ気がした。

それでも男は知らぬうちに口を開いていた。

「……あんたは誰なんだ？　なぜ自分を助けた？」

眼鏡の男は反応が帰ってきたことが嬉しいのか口角を上げ男に笑いかけながら嬉々と話しだした。

「貴方が選ばれたからですよ。あの地獄で貴方は幸運にも私と生きて出会うことができた。まさに運命というほか無いでしょう。ですから貴方を助けたのです」

眼鏡の男は一息にそう言うのと傍らの卓に置いてあった瓶を手に取りと椀に水を注ぎ、男に差し出した。

男が椀を受け取るのをためらっていると眼鏡の男は一気に椀の中の水を飲み干した。

「安心して下さい。毒など入っていませんよ」

そう言うと眼鏡の男は再び椀に並々と水を注ぎ男に手渡した。

男は喉が渴いていたせいもあるのか一息に椀の水を飲み干してしまつた。

「もう一杯要りますか？」

「遠慮させてもらおう」

男はそう言つと身を正し再び眼鏡の男に向き直つた。

「それよりも助けていただいたこと感謝いたす」

「礼には及びませんよ」

「そうか、命を助けてもらつて礼の一つもできないとは情けない」

「厚意というものは素直に受け取っておくほうがよろしい時もございますよ」

「うむ……ところであなたのことはなんと呼べばいいのだろうか？」

「ああ、自己紹介がまだでしたな、私のことは気軽に于吉と呼んでいただければ」

「于吉殿か……。服装などを見るかぎり道士と見たが」

「あなたが間違つてはいませんが、あなた達がもつとわかりやいように説明すると天の御使いと言う方が近いでしょうな」

男はこの言葉を聞いた瞬間に于吉という男がより一層きな臭く感じた。

確かに眼の前の于吉という男は如何にもな服装をしている。しかし、服装などその気になれば誰にでも真似することができる。

男は言っていることが本当かどうか顔を凝視するが、于吉は緊張も

何も感じないのか涼しそうな顔をして男の顔を見ながら平然と腕に水を注ぎ飲んでいた。

「信じていない様子ですね」

于吉はそう言うつと懐から短剣を取り出し鞘から短剣を抜いた。

「少し痛いですが、一瞬ですので我慢してくださいね」

于吉は男の腕を無理やり掴むと短剣を男の腕へと振り下ろした。その瞬間、男の腕に激痛が走った。それもそうだ、男の腕には深々と短剣が突き立てられているのだから痛くないはずがない。

男は言葉にならない叫びを上げるが于吉は気にする用などなく素早く腕から短剣を抜き取ると腕から指の先をつたり真つ赤な鮮血が床へと数滴落ち小さな血溜まりを作る。

その次に符のようなものを再び懐から取り出すと男の傷口へと貼りつけ、于吉が呪文らしきもの呟き、符を再び傷口から外すと、傷など元からなかったかのように綺麗に傷口が消え去っていた。

「これで信じてもらえたでしょうか？」

于吉はそう言うつと血の付いた短剣を拭い鞘に収め懐へと仕舞った。床には消えた傷口とは違い、まだ暖かい血溜まりが残っていた。

「……………」

「この程度は私にとっては造作もありませんので、あまり驚かれても困るのですがね」

「……………于吉殿が天の御遣いということとは信じよう。たしかにこのよ

うな芸当が人にできるはずがあるまい」

男はそう言いながらも未だに目の前の出来事が信じられないのか呆けていた。

「さて、本題に入りたいと思うのですが宜しいですか？」

男は于吉に話しかけられようやく思考が頭に戻ってきた。

その戻ってきた思考で本題とやらどのようなものか考えを巡らす
答えはでない。

もしかしたら気が変わり礼を要求されるのではないかとも思ったが、
あのような力がある目の前の男がこのように小さなことにこだわる
はずもない。

「……本題とは？」

「簡単なことです。貴方はこれから何をしたいですか？」

最初、于吉の言いたい意味がわからなかった。

何をしたい？ 男はしばらく考えを巡らす
が答えらしき答えはでない。
い。

そのようなことを言われても天に何も願ったことすら無いのだ。

それに男はただただ生きていることが、この上なく素晴らしいことに
感じられていた。

「……何もないが」

男はこの答えに于吉が何かしらの答えを期待していたのならば、さ
ぞかし男に失望するだろうと思っていたのだが于吉は答えに満足し
たのか大きく一回うなづく
と懐から一冊の書物を取り出した。

「それならば、これを差し上げましょう。もし、貴方にやりたいことができたときに役立つことでしょう」

于吉は卓の上に書物を置くと再び男の顔を見た。

「少々厚かましい気も致しますが、やはり礼をもらっても宜しいでしょうか？」

男はやはり来たかと心のなかで思った。

この時勢に赤の他人に無償で施す者などいる筈がない。

「自分ができることでもいいのならば」

「それならばお言葉に甘えまして、今日から貴方には張角と名乗っていただきたいと思えます」

「……………」

「何が不満でもございますかな？」

不満がないわけが無い。

誰が好んでそのような名を名乗るといふのだろうか。

だが、男は文句をいう事も断る事もしない。

恩ももちろん感じているが、目の前の男の力があれば断った瞬間にでも殺されないと限らない。そのような考えが頭に湧いた時点で男から拒否という選択肢は消えていたのだ。

「……………わかった」

「では、私は用事がありますので、またいつかお会い致しましょう」

于吉はそう言うと、部屋に来た時と同様に唐突に部屋を出ていった。

男はその様子を見送ると寝台の上に勢い良く寝そべる。寝台がギシギシという音を立てて軋むが男の頭の中は于吉という男のことではないだった。

それなりに話した気もするが、于吉という名前以外は何一つ分からなかった。

あの男は自分を助けたことは運命だとか言っているが、あの地獄で見た奴の目は忘れることは出来なかった。必ずや別の目的がある気がするのだ。

男はそうようなことを考えながらも于吉の置いていった書物が、どのようなものかと気になり卓の上を見ると、卓の上には書物の他に綺麗な布で作られた袋のようなものが置かれていた。

男は書物よりも袋の方が気になり手に取るとずっしりとした重さが手に伝わってきた。

袋の口の紐を解き中を見てみると、男が今まで手にしたことのないような量の銭が入っていた。

于吉の忘れ物かと思い再び袋の口を紐で縛ると男は机の上に袋を置いた。

これほどの大金ならば、すぐにでも戻ってくるだろうと思っていたのだが、その日のうちに于吉が再び男の元を訪れることはなかった。

第1話 張角再誕（後書き）

今のところ忙しくなる予定もありませんので2週間以内に第2話を描き上げて投稿したいところです。

誤字や脱字の発見をして下さいましたら報告していただくと嬉しいです。

感想などもいただくと嬉しいです。もちろん改善すべき点などがありましたらご意見ください。

第2話 変わらない世界

男がこの街に住み着いてから彼は二ヶ月が経った。

男は街の近くのボロ小屋に住んでいた。

住んでいるといっても誰に了承を取ったわけでもなく壊れかけていた小屋を適当に直してかってに住んでいるのだが。

男は朝のまだ活気づく前の大通りを袋を背負いながら歩いていた。

最初の頃は街のどこに何があるのかも分からず、何かしようとする
と街の人に訪ねていたが、今では慣れたものだ。

男は慣れた手つきで脇に挟んでいた敷物を地面に広げると、その上
に腰を下ろす。

一息つくと背負っていた袋を紐解き、中から五十個近くの竹籠を出
すと敷物の上に丁寧に並べた。

最初は暇つぶしに作った竹籠を適当に売っていたのだが、いつしか
生活を支える重要なものとなっていた。

「どれも自慢の逸品だよ！！ 早く買わないと売り切れちまうよ！
」

男は声を張り上げながら道行く人を呼び止めたりして商品を売って
いた。

しかし、なかなか売れない。立ち止まったり、竹籠を手にとつてく
れる人もいるが売れない。

それもそうだ、竹籠なぞ壊れない限り何個も買うものではない。

しかも、男は1ヶ月近く同じ場所で竹籠のみを売っているのだから
結果として当然である。

それでも何個か売れるだけ男は幸運なのかもしれない。

日は空高くに上り、男の腹は鳴っていた。

朝から、この場所を陣取り竹籠を売っていたが昼ごろになっても十個も売れていない。

この状況を改善するには男も竹籠以外に何かを作って売りに出すしか無いとわかって入るのだが、生憎、男は竹籠以外に売り物になりそうなものを作れなかった。

これが売れないということは男は昼飯はおるか夕食さえを食べることはできないということだ。

そんな男の気を知るわけもなく、男の腹は先程から小気味のいい音をあげていた。

「竹籠を5つほどもらえるかな」

「毎度あり……って、張燕か」

「なんだ？ 客だぞ、もつと有難がれよ」

「そりゃ有難いよ。毎日のように竹籠を買ってくれるのはお前ぐらいなんだからな」

今、男の目の前にいる男は張燕といい男と最も付き合いの深い奴だった。

最初にあつたのは街の酒店だ。

その日は、酒店が混んでたために男は他人と同席することになった。そこであつたのが張燕だった。

たまたま一緒の席に座っただけだったのだが、殊の外ウマが合い、その日は店が閉まるまで酒と一緒に飲んでいた。

張燕とは、それっきりの付き合いだと思っていたのだが、次の日、男が今のように道で竹籠を売っていると張燕が通りかかった。

その時も確か竹籠を5つ買っていた気がする。

その次の日も会った。そのまた次の日も会った。そのまたまた次の日も会った。

さすがに男も訪ねてみた。なぜいつも俺に会いに来るのだと。

答えは簡単だった。

張燕は街の警邏隊に所属しており見回りの順路に男が店を構えているからいつも会っていただけなのだ。

その日は張燕と二人の会った酒店で店が閉まるまで酒を飲んだ。

男の腹が再び小気味のいい音を立てていた。

「さて籠も無事売れたことだし昼飯でも食べに行くか？」

「そうだな、さすがにこれ以上は我慢できそうにないからな。仕事の方はいいのか？」

「丁度休憩だよ。休憩だからお前に声をかけたんだよ」

「それなら休憩が終わらないうちに食べないと。急いで片付けちまうから少し待ってくれ」

男はそう言うと目の前に並んでいる竹籠を手早く纏めると袋に詰め込み始めた。

「急ぎすぎて大事な品物を壊すなよ」

「壊れたときは半値でお前に売ってやるよ」

「これ以上竹籠はいらねえよ」

そんな冗談を言っているうちに男は竹籠を袋に詰め終わり、敷物は丸めて脇に挟んでいた。

「さて行くとするか」

張燕はそう言うのと馴染みの酒店へと歩き始めた。男は袋をしっかりと背負い直すつついて行った。

酒店はそれほど混んでおらず二人はすんなりと席に座ることができた。

二人ともラーメンを頼んでいた。出てきたラーメンは男のに変わったところは無いのだが、張燕のはラー油の中に麺が入っているような色のスープをしていた。

張燕はそのラーメンを躊躇など一切見せずに勢い良く啜り込んでいく、見ているこっちが辛くなってきそうだった。

「しかし、いつもよくそんな辛そうな物を平気で食べるな」

「いやいや、辛そうに見えるが食べてみると案外平気だぞ」

張燕はそう言いながら真っ赤なラーメンを啜り続ける。

男はその様子も慣れたせいもあり特段気にすることもなく自分のラーメンを啜っていた。

最初の頃は真っ赤なラーメンが気になり少し食べてみたが常人には到底食べれそうにない辛さだった。

飲み込んだ時は喉が焼けるかと思いつつも何となく飲み込んだが、数時間後、再び真っ赤なラーメンの威力を体感することとなった。

しばらく二人は他愛のない談笑をしていた。

竹籠が売れないや、仕事の割に警邏の給金が少ないなど日常のどうでもいいようなことを話していると店の中に張燕と同じ服装をした男が駆け込んできた。

「ここにいたのか張燕さん！！ 今、北の区画で暴動が起きているんだよ！！ 俺も他の奴らを集めたら急いで向かうから張燕さんは先に応援に行ってくれないか」

「了解した。できるだけ早く来てくれよ」

「ああできるだけ早くするよ」

店に飛び込んできた男は来た時と同じような速さで店を出ていった。先ほどの話は店にいた他の客たちにも伝わっており、何があったのかと話す奴もいれば、見に行ってみようと残っている飯を急いでかきこむ奴もいた。

「ということらしいから、俺は仕事に戻るとするわ。お前も気を付けるよ」

「俺も面倒事に巻き込まれるのは嫌だからな」

張燕は代金を卓に置くと急いで店を飛び出していった。

張燕の真っ赤の器の中には麺が未だに残っていたが流石に食べる気もなれず、男は代金を払うと店を後にする。

店の外は昼時だというのに人通りはあまり多くなかった。

大方、北の暴動を見に行っているのだろう。

男は北区とは反対にある広場へと足を運ぶことにした。

普段は大量の市が軒を連ねており、人が多いのであまり近づかないのだが、今日はいつもよりは空いているだろうと思っていたが相変わらずの盛況ぶりだ。

それでもいつもよりは人が少なく感じれた。

だが、広場の一角だけに妙に人が集中していた。

そこにいる人々は途方にくれている者もいれば怒りのあまり何かを怒鳴っている者もいる。

何があるのか見ようにも人垣のせいで何も見えず、仕方ないので近くで市を開いている男に聞くことにした。

「すまんが何であそこばかり混雑しているんだ？」

「ああ……臨時徴収のお知らせだよ」

「臨時徴収？」

「近々何やら大きな戦をするらしくてね。そのための金と兵糧を集めているのだ」

「また戦なのか……」

「全く！！ ようやく平和になったかと思えばまた戦だ！！ こっちは商売上がったんだよ」

「親父はどう思うよ。戦をすれば平和が訪れると思うか？」

「さあな。上の人が考えていることなんざ庶民には分からねえよ」

「所詮俺たちは泣き寝入りするしかないのか」

「そうだな……。そういえば平原は税も軽く随分な善政が行われていると聞いたことがあるな。俺たちの街も治めてくれはしないもんかねえ」

「平原というと、先の乱で活躍した劉備か」

「さて、今日は店じまいとしちまうかな」

店の親父はそう言つと店に並べている商品を片付け始めた。

残っている量からするに今日はあまり売れてはいないらしい。

男もこれ以上することもないので広場から去つた。

相変わらず広場の一角では怒号が聞こえてくるが、その声は広場に虚しく響いているだけだった。

家に戻ると何をするわけでもなく男は寝そべっていた。

竹籠を作つた所で売れ残りが増えるだけなので作る気も起きない。

それに、また戦が起こるのかと思うと何もする気が起きなかった。

「所詮、民は捨て駒か……」

黄巾の乱の前と何一つ変わっていないかった。

いくら下のものが苦しもうと上にいる連中は顔色ひとつ変えずに現状を改善するどころか更に苦しみを与えてくる。

さらに上同士で争い、その結果が下の者に対しての重税や徴兵などとして現れている。

だが、もしも、そのようなものを物ともせず跳ね除けられる力があれば……。

「……所詮は無力な俺には何も」

その時、男の目に一冊の書物が止まった。

于吉に貰ったはいいものの読まずにしまい込んでいた例の書物だった。

男はおもむろに書物に手を伸ばすと読み始めた。

ところどころ読めない文字もあるが丁寧な絵も描かれており、書いてある内容はぼんやりとだが理解することができる気がした。

男は寝る間も惜しみ書物を読み続けた。

第2話 変わらない世界（後書き）

今のところ忙しくなる予定もありませんので2週間以内に第2話を描き上げて投稿したいところです。

誤字や脱字の発見をして下さいましたら報告していただくと嬉しいです。

感想などもいただくと嬉しいです。もちろん改善すべき点などがありましたらご意見ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7245x/>

黄巾の旗は二度翻る

2011年10月31日01時26分発行